

京都大学	博士(文学)	氏名	岩 野 祐 介
論文題目	無教会としての教会 ― 内村鑑三における個人の信仰と社会性との関連について ―		
(論文内容の要旨) 本稿の目的は、内村鑑三のキリスト教思想の内実を明らかにすることである。 内村は日本キリスト教史上最も著名な人物の一人だが、そのキリスト教思想について必ずしも広く知られてはいない。その思想の内実に関しても、いまだ分析・解明すべき点が多々残されている。本稿では特に、内村における個人の信仰と社会性との関連について扱う。 本稿の構成は以下の通りである。1章では序論として、日本キリスト教思想研究に関する筆者の問題意識と研究方法、及び内村研究の現状と先行研究について示す。2章から4章では本論として、内村における「個人 ― 信仰共同体 ― 社会」の連関について、2章では個人の問題、3章では信仰共同体の問題、4章では社会の問題をそれぞれ扱う。5章が結論である。 序論となる1章の概要は以下の通りである。 本稿では「日本キリスト教思想」を、それが厳密に「日本的」と言えるかどうかは問わず、当時の日本に存在し受け入れられていた文化を背景に、日本語によって展開された思想、と仮に定義して話を進める。 内村鑑三は、日本のキリスト教指導者の中では、最もよく研究が進んでいる一人である。先行研究としては、内村のキリスト教思想の全体を概観するもの、特に「日本」という側面やその「無教会主義」に注目したもの、特に社会思想家・政治思想家としての内村に注目したもの等がある。しかしそれらの研究が相互に有機的に結び付けられ、組織・整理された段階にあるとは言えない。無教会主義の内側・キリスト教の内側からの研究と外側からの研究とを融合させ、現代の状況に対応した視点を構築することが課題である。 本稿では、内村のキリスト教思想の内実を、彼の聖書解釈テキストを素材として解明することを試みる。内村の聖書解釈テキストを主題材としてなされた思想研究はさほど多くはなく、その点において本稿は内村思想研究、日本キリスト教思想研究の全体的な展開に関してわずかばかりの貢献ができるものであると考える。聖書解釈テキストを題材として使用する理由は、独立伝道者となって以降、内村にとって最も重要な仕事が聖書の研究であり、彼の残した多く文章の大半が聖書に関係したものであるからである。 以下には本論部分の概要を示す。			

2章では、個人の信仰の問題について扱う。内村は、宗教は個人的なものであると主張するが、この「個人的」とは、人間は単独の個人として直接神に向き合わねばならない、という意味であり、自己中心的な個人主義とは異なる。自己中心的・排他的な自己は否定されねばならない。その自己中心性こそ結局は自らを苦しめる罪悪感のもととなるからである。人間は本来、神との親しい関係のうちにあった。ところが人間は自己中心的な自由を求めて神から離れてしまった。それが罪のはじまりである。

しかし同時に墮罪の瞬間から、神の元へ戻りたいと切実に思う心が人間に生じており、また神も救済の途を用意することになった。人間の罪は神の独子イエスにより贖われるのであり、それを信じ神に頼ることだけが人間を救済する。人間は神に服従することにより、自らが神に与えられた役割のもと生きていることを悟ると内村は考える。そこに、神と人間との正しい関係、即ち義があることになる。

罪人を罪人のまま、自らの子を犠牲としてまで救おうとする神には、人間に対する深い愛があると内村は考える。神の義とは人間を裁き決定的な罰を与えるようなものではないのである。一方赦された人間は、神から与えられた義、正しさを、人間世界の中でも現実化することにより、神の愛の深さに応答することができる。

内村は人間の自由を重視するが、この自由は人間対人間の場面における自由である。自由な人間とは神に服従し神とともにある人間なのである。神—人間の関係では、人間の自由意志が働く場は信仰への入口の場面に限られており、能動的な面において人間は無力であるとされる。しかし罪を厭い、自らの内部分裂に苦しみ、十字架のイエスによる贖罪に感謝し、終末的な救済の完成を待望する感情、感受性に対して、内村は信頼をおき、高く評価しているように思われる。

3章では、信仰共同体について扱う。信仰共同体の土台は、信仰に基づく人間関係である。この神への信仰を媒介とした人間関係のあり方は、内村が祈りの問題を扱う中で次のように明らかにされている。内村は、祈りにおいても自己中心性を捨て、自分ではなく他人の為に祈るべきとする。ゆえに、お互い祈り合うことが重要となる。内村のいう個人の信仰の背後には、その個人を後からささえる他者がいるのである。また、同胞全てが恩恵を受け救われるのでなければ自分も安心して救われることができない、と内村は考える。人間は他者とのつながりの中で生きており、他者とのつながりの中で救われなければならない。そして救済体験を通して他の人間に対する愛を確認するのである。

しかし内村は、義と愛の両方がキリスト教信仰においては重要であり、愛ばかりを強調するキリスト教理解は誤りであると主張する。内村は、愛を相互作用的に働くものと考え、その根源を神に求める。神の愛は独子イエス・キリストの犠牲により表現される。自らにとって最も大切な「我が子」を犠牲にするほどに、人間に対する神の愛は深い。本来自己中心的である人間は、神の愛を受け入れることにより、他者を愛することができるようになる。

教会は、このような愛の働く場と捉えられる。内村によれば、自由意志に基づきイエスをキリストと告白することと、キリストの愛にもとづく温かい関係が「教会」の本質である。それは制度ではなく霊的なものである。しかし欧米由来の教派教会には、それぞれ特定の歴史的背景があり、それら歴史性を共有しない日本にはそぐわない。また、教派性には他を排除するような党派性としての性格がある、と内村は考える。ゆえに内村は、キリストは教派教会から解き放たれねばならない、と主張するのである。

4章では、内村の社会に対する働きかけと、信仰との関わりを扱う。内村は、社会を改革しようとするのであればまず個人の救済が必要であり、そのためにキリスト教伝道が必要であると考えていた。ゆえに内村は、キリスト教会による社会事業が自己目的化することに関して批判的であった。キリスト者にとっての善行とは神の救済に対する応答・結果であり、決して目的とはならないのである。

社会倫理、社会道德という枠で考える場合、内村は武士道のような道德観を肯定的に評価する。とはいえ内村が武士道の特徴として挙げる徳目はいずれもパウロ書簡で挙げられているものと共通しており、特に階層としての武士、その戦闘性ということ意識してはいない。それらはいわばキリスト教がそこに接木される土台となる。

旧約の律法もまた社会倫理の枠を越えて、新約から遡る形で見られる。律法や誡めは、「守ろうとしても守れない」ことにより、逆説的に人間に罪を自覚させ、イエスへの信仰へと導くものとなる。同時に律法は神と人間との正しいあり方を示すものであり、それは人間どうしの関係にもあてはめられるべき雛形である。また内村において律法は、人間の基本的な権利、あるいは平等性を守るものとされる。人間を含む万物が神により造られ、生存環境が神から与えられたものであると考えることにより、あらゆる人間は相対化し、平等化されるのである。

以上本論より導き出される結論は以下の通りである。

内村のキリスト教思想は、人間の自己中心性という罪からの解放、救済に集中するものである。間に神を媒介させることにより個人が他者とつながる構造は、内村における人間関係の基本構造である。社会もこの構造の上に成りたつものとされる。さらに終末的な救済の完成は、個人の救済だけではなく人類の救済、世界全体・宇宙全体の救済であるとされる。

内村の無教会主義は、教派教会の枠を超えることにより、世界全体へと開けていく可能性を秘めている。内村の重視した「聖書研究会」という試みもまた、一人ひとりが個人として自由に聖書と「出会い」、そしてその読みを共有していくことにより他の人間とも、「出会う」場として見直す意味があるのである。

(論文審査の結果の要旨)

内村鑑三(1861-1930)は、近代日本を代表するキリスト教思想家であり、国内外で知られた著名なキリスト者である。内村研究は、内村の直弟子の系譜に属する無教会主義の立場からの研究はもちろん、キリスト教研究の領域を超えて日本思想史や政治思想の研究領域に及んでいる。また、近年、東アジアや欧米での内村研究も盛んであり、内村のキリスト教思想が海外で高い評価を受けていることがわかる。しかし、内村の思想内容は多岐多方面にわたるだけでなく、そのときどきの問題状況に規定された論述がなされるなど、その全貌を整合的に論じることは決して容易ではない。したがって、内村研究においては、膨大な先行研究を参照しながら、研究の視点や方法論を練り上げることが求められる。

本論文は、第1章「はじめに」において、先行研究の詳細な検討が行われ、論者自らの問題設定の明確化と緻密な方法論の提示がなされる。まずここに、論者の独創性を指摘することができる。内村は、一方で信仰が個人の事柄、個人と神との関係性の問題であると明確に述べながらも、他方でその信仰に立って、不敬事件、非戦論、再臨運動などを通して社会への積極的な関与を行った人物である。本論文では、副題「内村鑑三における個人の信仰と社会性との連関について」とあるように、この信仰の個人性と社会的関与という緊張関係にある思想の二つの極を繋ぐ内村の内的論理の解明が目指されている。この問題設定によって、これまでの内村研究では十分に明らかにされてこなかった内村の思想的核心への接近が可能になった。本論文では、信仰の個人性を扱った第2章から、信仰共同体を論じた第3章を経て、社会・国家論に関連した第4章へと議論が展開されているが、この構成は、論者の問題設定に即したものとなっている。続いて、本論文の方法についてであるが、論者は、聖書解釈関連テキストから内村の思想の内的論理の解明を試みる。内村が生涯取り組んだ「聖書研究」の成果である聖書解釈関連テキストは、質量共に内村の著作群の中心に位置するにもかかわらず、これまでそれにふさわしい取り扱いがなされてこなかった。本論文は、聖書解釈関連テキスト自体の分析に基づいて内村のキリスト教思想の内的論理を明らかにするという方法論を提示し、それによって内村研究の前進に大きな貢献を行った。

このような問題設定と方法論に従って明らかにされた内村の内的論理とは次のようなものである。すでに指摘したように、内村において、信仰とは神と信仰者の個人的な関わりの事柄であり、神と人間の関係は、神の能動性と人間の受動性としてまとめられる。人間は自らを縛る自己中心性より救済されるために自分では何もしえない、人間の救いは神から一方的に与えられるものであり、人間は神に信頼し、救いを受け入れることができるだけである。これは内村のキリスト教信仰の基本である。しかし、神の能動性は人間を受動的状態にとどめておくものではなく、むしろ、人間が他者へ積極的に関与することを可能にする。つまり、神からの救いを受けた人間は、神の愛への感謝からその愛を他者へと伝えるように促されるのである。神から信仰者へ、信

仰者から他者へと広がってゆく「愛の波及」「愛の波動」が、信仰の個人性を社会性へと関連づけるものとなっている。これが、本論文が明らかにした内村の内的論理である。これは、神の能動性が人間の受動性を能動性へと転換し、自己閉鎖的な人間を他者へと開くプロセスであり、それを支えているのは、神の能動性への信頼と、神の能動性を受け取ることができる人間の感受性への信頼にほかならない。本論文の各章では、この内的論理に基づいて、愛と義、祈り、万人救済、伝道などの多様なテーマが具体的に分析され、これによって、内村の多岐にわたる思想内容の統一的な理解が示された。

また、聖書解釈関連テキストの分析によって明らかにされた、内村の自然理解や女性論は、内村のキリスト教思想の現代的意義を論じる上で示唆的であり、今後の論者の研究の進展が期待される。

このように優れた内村研究と評価できる本論文にも、いくつかの問題点あるいは不十分な点が見いだされる。たとえば、内村の聖書解釈関連テキストからその内的論理の解明に集中するあまり、キリスト教思想史の諸動向や同時代の思想状況と内村との関連についての議論が手薄になった。また、問題設定が明確な分、やや強引な解釈が散見され、議論の掘り下げが不十分な箇所も見られる。しかしこれらの問題点は、広範かつ錯綜した内村の思索から、それを統一的に読み解きうる内的論理を取り出した論者の力量から判断すれば、今後のさらなる研究によって克服可能なものであり、本論文が内村研究として学界に独創的な貢献をなしたことを否定するものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として、価値あるものと認められる。2010年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。